

思い出の曲がそれに関連する 出来事の回想に及ぼす影響について

長谷川 裕 子

【問題と目的】

音楽の重要な作用は感情を喚起することと言われており、日本では高齢者を対象に懐かしい音楽を聴取させ、過去の回想を促進させることを目的とした音楽療法が盛んに行われている。懐かしいと思う体験を回想することはポジティブな感情を喚起することが明らかにされており、これらは高齢者だけでなく大学生を対象とした調査においても同様の結果が認められている。そこで本研究では、個人が「懐かしい」と思う音楽を聴取することは、「懐かしい」と思う出来事の回想を促進する効果があるか、「懐かしい」思い出と音楽の回想もしくは聴取を行うことはポジティブな感情を喚起する効用があるかについて、質問紙とインタビューを通して検討を行った。

【方法】

実験は、まず事前調査として懐かしい音楽とそれにまつわる出来事の有無、インタビュー調査への協力の可否を尋ねた質問紙を配布し、297名（男性88名、女性209名）から回答を得た。本実験へは36名（男性10名、女性26名）の協力が得られた。協力者は音楽を聴取する群と音楽を聴取せずに回想のみを行う2群に無作為に選別し、個別で実験を行った。音楽聴取群は、事前調査で回答させた個人が「懐かしい」と思う音楽を実際に聴取させ、聴取中に音楽に関連する思い出についての回想を行わせた。音楽聴取無群は、音楽と思い出の両方の回想を行わせた。その後、両群にインタビューを行い、インタビューは、思い出の体験時期や内容、さらにそれらに対する個人の意味づけについて半構造化面接を中心に質問を行った。多面的感情状態尺度・短縮版への記入を実験前・中・後に、想起内容の肯定的回想尺度と音楽の感情価肯定尺度への記入を実験前・後に行わせた。

【結果および考察】

音楽作品聴取の有無による影響と、各実験過程における変化を検討するため、想起内容評価・感情評価・音楽評価の尺度を従属変数とし、音楽作品の聴取の有無を独立変数とした。そして、音楽聴取有無を被験者間要因とし、実験期間を被験者内要因とした分散分析を行った結果、音楽を聴取した後インタビューを行った群と、回想のみをした後インタビューを行った群との間に交互作用は認められず、両群において、回想とインタビューを行ったことによる、ポジティブな感情の増大と、ネガティブな感情の低減が認められた。よって、懐かしい音楽を聴取しても、聴取せずに個人の中で音楽の回想のみを行ったとしても、個人が「懐かしい」と思う音楽はポジティブな感情を喚起するという結果が得られた。しかしながら、音楽を聴取した群のみに、活動的快感情と親和感情の増大が示唆されたことから、音楽を実際に聴取することの有効性が示された。